

もくじ

作家 皆川行人について① P1

橋本幸吉について 一古久屋店主・千住町消防組組頭一 P2

足立史談

第700号

2026年6月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



【図1】 皆川行人 田山花袋や菊池寛と親交した作家。野村豊氏蔵。

作家 皆川行人について ①

千住出身の若き作家の紹介

野村豊
郷土博物館

はじめに

皆川行人（みながわこうじん）という作家をご存じでしょうか。郷土博物館で

は、これまで耳にしたことのない人物でした。今年のはじめ当館の特別展「千住宿400年」にご来館くださったお客様のお一人に野村豊さん（神奈川県在住）がいらつしやいま

した。野村さんの祖父にあたるのが皆川行人（以下「行人」と略）です。野村さんは、その後のご来館の際に調査成果を博物館にご教示下さいました。博物館が足立区出身の近代作家と出会った瞬間でした。

そこで今号から、行人の作品と人物をご紹介します。作品や足跡の調査は始まったばかり。私たちは関連情報を広く集めたいと考え、本稿をお届けする次第です。以上の経緯から、本稿は調査を進める野村さんと、調査協力を行う郷土博物館の連名でお伝えいたします。第一回となる今回は、行人の文芸活動とその出身について紹介します。

1 文芸活動の紹介

■田山花袋選『二十二篇』自然主義文学の先駆者として、田山花袋（一八七二〜一九三〇）は、鳥崎藤村と並び称される存在です。花袋は、大手出版社である博文館の雑誌『文章世界』の編集者としても活動し、若い小説家や作家志望者の発掘に力を注ぎました。その一環として作品を公募し、刊行されたのが『二十二篇』（明治四二・一九〇九年、東雲堂書店）です。題名のとおり、本書には二十二作品が収録されています。花袋の序文をご紹介します。

「二十二編」が世に出ることになった。これらの作は、私が四年間

に、若い人々の無数の作品の中から特に選んだものである。…略…芸術には横にしては才分を要し、縦にしては年齢を要する。そしてそれと同時にこの才分と年齢とに縛せられないほどの自由を欲する。諸君は此の難しい芸術に赴くの途にあるものである。

私は此の「二十二編」を世人に薦め得たことを誇りとする。

明治四十二年十二月十七日

田山花袋

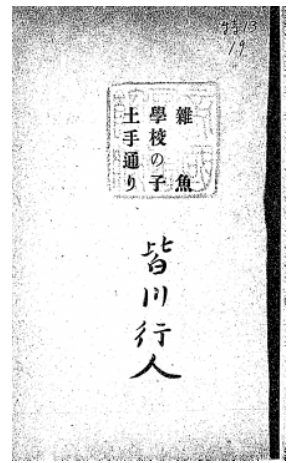
※ 引用および同書の図版はいずれも国立国会図書館デジタルコレクション。／序文本文では「篇」を「編」と表記しますが、表紙・内扉・奥付などで「篇」が用いられています。

この序文からは、花袋が四年間にわたり数多くの応募作の中から作品を厳選したこと、そして、それらを世に送り出したことに大きな自信を抱いていたことがうかがえます。

■収録された行人の三作品 行人の作品は、本書の巻頭に置かれた三作品です。目次には、作品掲載年月とともに、次のように記されています。

「雑魚」（四十年十月）
「学校の子」（四十年五月）
「土手通り」（四十一年十二月）

これにより行人がこれらの作品を投稿した時期は、明治四十年（一九〇七）から四十一年（一九〇八）に



【図2】『二十二篇』の内扉

かけてであったことがわかります。
【図2】は三作品の内扉です。作品名の下にある「皆川行人」の署名は本人の筆によるものを製版しています。

この三作品のほかにも、明治四十年(一九〇七)には『詩人』(詩草社)第一号から第五号までに詩を連続投稿し、さらに他の小説作品も発表しています。これらの活動については、次号以降で順次ご紹介してまいります。

今回お示しした小説や詩作は、数え年で十八才から十九才のときの作品です。まさに若手作家として活動していました。なおペンネームの読みですが「皆川行人」の紹介記事で「みながわこうじん」とした読み仮名があります※。

※Ⅱ出典は出口競『全国高等学校評判記』(明治四五・一九一二年)、『久米正雄全集』第十三卷(昭和六・一九三一年、平凡社)など。

ドイツ語教授として

行人の本名は「野村梅吉」です。

千住中組の青果問屋「橋梅」の出身で、野村元吉の子として明治二二年(一八八九年)に生まれました(昭和二二・一九四七年没)。

そして第一高等学校(旧制。現、東大)から京都帝大(現、京大)に進学します。その後、野村梅吉は福岡高等学校(福岡県、のちの九州大学)のドイツ語教員となり、大正十三年(一九二四)に教授に就任しました。梅吉の教え子で国文学者の井出恒雄氏(福岡女子大学教授)は次のように回想しています。

野村先生というと、次のような光景を思い出す。：略：菊池寛にお茶を出しながら話を聞いていると、野村先生が入って来られた。すると菊池寛が立ち上がって、「やあ、野村君。ここにいたのかね。」といって、懐かしそうに野村先生を見た。：略

※Ⅱ福岡高等学校同窓会編『青陵 思い出の記』、一九七二年。九州大学中央図書館蔵)

この記事から同世代の文芸界の大家、菊池寛(一八八八〜一九四八)との親交がしのばれ、学生時代の交流や服装について語り合う記述も続きます。大家たちと交流した千住出身の若き作家「行人」について次号以降も作品を中心にご紹介してまいります。

(文：博物館学芸員 多田文夫)

橋本幸吉について

古久屋店主・千住町消防組頭

佐藤 貴浩

橋本幸吉(はしもとこうきち 明治十九年(一八八六)〜昭和三十五年(一九六〇))は、千住仲町の橋本家当主である。橋本幸吉は、千住の近代史を語る上で、重要な人物であるが、これまでほとんど知られていない(※1)。そこで、本稿では、橋本幸吉について、簡単に紹介したい。

【左 橋本幸吉写真】(『国民自治総覧』) 国立国会図書館近代デジタルコレクション

■橋本家 千住仲町の橋本家といえは、藁屋橋本家の存在が知られているが(※2)、橋本幸吉の橋本家も同族で、江戸期から穀屋という屋号で商売を営んでいた。幸吉の父勘助(昭和三年(一九二八)没)は、明治期に古久屋(こくや)という呉服店を開業し、昭和二年(一九二七)には、橋本家が「南足立郡唯一の多額納税者にして有数なる名門たり」と記されている。橋本家は千住町を代表する名家だった。

ちなみに幸吉は、大正六年(一九一七)に「呉服物仕入法の改善意見」、翌大正七年にも「日本のシヨウ・ウキンドウ発達物語」という文章を発表しており、熱心に商売に取り組んでいたようだ。そして、この頃には古久屋の主導的立場にあったようである。

■古久屋デパート 大正十一年(一九二一・二二)頃、古久屋は地域初の鉄筋コンクリート造のデパート式店舗を建築した。場所は現千住仲町二四番地の北西端の一角である(地図参照)。



地図：古久屋の現在地



上：古久屋の外観 下：古久屋の広告
 ※上・下とも、相川謹之助氏提供のコピーによる
 (原本は、故長谷川浩平氏所蔵)

部宿」の半纏を着た人や、神職が写っており、九月に行われる仲町氷川神社の祭礼に際して撮影したとみられる。旧日光街道に面した場所に洋風二階建ての立派な建物が写っているが、画像が暗く、ややわかりにくいので当時の広告イラストも掲載する。二つを比べてみると、近代的な古久屋の外観がよくわかるだろう。

実際に古久屋デパートを見たことがある相川謹之助氏(足立史談会会長・昭和十一年(一九三六)生まれ)によると、戦前は古久屋前の通りを地元の人々は「古久屋のお通り」と呼んでいたという。このことから、古久屋の建物が地元のシンボリックな存在になっていたことがわかる。しかし、相川氏が小学一年生

の昭和十八年(一九四三)頃には、営業を停止していたという。そして、建物も昭和二十年(一九四五)の空襲で焼失したとのことである。史料上では古久屋がいつまで営業していたのか、そして建物もいつまで残っていたのかを確認できないため、貴重な証言である。

■千住町消防組組頭就任 江戸時代の千住では、上組・中組・下組という三組の火消が組織されており、合わせて南北千住消防組と呼ばれていた。明治二十七年(一八九四)、国が「消防組規則」を定め、公設の組織となった際、中組・下組が千住町消防組、上組が南千住町消防組となった。橋本は、明治三十九年(一九〇六)に横須賀重砲兵第一連に入営した。

除隊後、大正八年(一九一九)に千住町在郷軍人会分会長となる。そして、大正十二年(一九二三)六月に千住町消防組組頭に就任したが、拙稿執筆段階では、その経緯は不明確だった。

しかし、東京府が橋本を表彰した際の史料に「大正十二年三月中千住町消防組ニ紛擾ヲ生スルヤ調停斡旋ニ奔走円満解決ヲ遂ケシメ、後選ハレテ同組頭ト為ル」(「公報」一三九号、一九二七年)と記載があることを相川氏から教えていただいた(※3)。これにより、「紛擾」(ふんじょう)の具体的な内容は不明だが、橋本が千住町消防組内の対立を仲介し、その結果組頭に就任したという経緯が判明する。

■南北消防記念碑 話は変わるが、足立区登録有形文化財(歴史資料)の「南北消防記念碑」(千住一―二―九 慈眼寺)は、大正十二年四月に、千住町消防組と南千住町消防組が合同で建碑した記念碑であり、所属した人々の名が二百名以上列記されている。しかし、橋本の名は記されていない。したがって、橋本は六月に組頭に就任する以前には、千住町消防組に所属していたわけではないと考えられる。

かつ地域の名家の人間だったからだろう。その結果、外部招聘のような形で組頭になったとみられる。当時、千住町消防組は、組織の「刷新充実」が必要であると指摘されており、橋本の登用そのものが人事刷新の意味を持つものであった。そして、消防組の近代化を図ることが橋本の課題となる。

■関東大震災と橋本 橋本が組頭に就任して間もなく、九月一日に関東大震災が起こった。橋本は千住町消防組と在郷軍人会の長を務めており、青年団を加えた三組織の人員を動員して、いち早く災害対応にあたっていた。当時の史料には、町民が混乱する中、橋本が「濡鼠」(ぬれねずみ)のようになって活躍したことが記されている。

震災の翌年、橋本は『大震災千住町写真真帖』の編集人として、発行に携わっている(発行所・千住町庶務課)。これは千住町の被災状況をまとめたもので、貴重な史料である。

■全国消防組頭大会 震災後、消防活動に対する意識が高まる中で、大正十五年(一九二六)九月二十四日から四日間、日本青年館において全国消防組頭大会(以下、大会と省略)が開催された。この大会は、その名の通り全国の消防組頭が集まって開かれた初めての大会で、台湾・朝鮮・樺太も含む全国から一三〇〇



『大震災千住町写真帖』大正13年5月発行

名以上の参加者があつた。さらに若槻礼次郎総理大臣も来賓として招かれ、祝辞を述べている。詳細は省略するが、橋本は大会開催を提案した主要人物の一人であり、関係各所との協議をはじめとする実務関係において重要な役割を果たしている。また、大会当日は副議長という要職も務めており、大会終了後、議長の有馬浅雄（滝野川町消防組頭）と橋本の連名で、浜口雄幸内務大臣宛に、大会で議決した内容についての建議書を送付している。

■**国庫補助金獲得運動** 大会では、日本消防協会の新設が議論され、設立に向けた運動が開始される。昭和二年（一九二七）五月二十日には、橋本等三名が鈴木喜三郎内務大臣を

訪問、一時間にわたり会談し、協会創立を「懇請」している。この時、鈴木大臣から国庫補助金交拠の話があつたという。

そして、昭和二年七月十四日に大日本消防協会が発会する。発会式翌日には、橋本をはじめとする代表者数名が田中義一総理大臣と面会した。

国庫補助金獲得は、橋本等の重要な目標となり、十一月にも首相官邸に赴き、各大臣に陳情している。七月に田中総理と面会した時も、当然、話題にあがつたことだろう。交付に至るまでは紆余曲折あつたが、橋本の尽力などもあつて、昭和四年（一九二九）度の予算として計上された。

時の総理大臣や国務大臣と面会し、陳情を行っている橋本の行動力は注目すべきものがある。

■**橋本の消防思想** 震災の翌年、橋本は「火災国防」と題する文章を公表している。この中で、前年の関東大震災の被害を「優に戦争に因つて起る惨禍を超越せり」とし、消火活動を「国防」の一環と捉え、「国民皆消防」を唱えている。橋本にとって火災の恐怖は戦争にも勝るものがあった。そのため、国民全体が消防意識を強くする必要があると考へていたのである。

こうした橋本の消防思想は、橋本自身が参加した講習会などを通じて学んだとみられる。特に、大正十三

年（一九二三）に半月程度にわたつて開催された警察講習所での講習は、東京帝国大学の教授をはじめとする錚々たる人物が講師を務め、当時最新の知識や実技を橋本等出席者に教えていた。

■**橋本の創意工夫** 最先端の知識・技術を学んだ橋本は組頭として様々なことを行つた。橋本は、町内に「撤水車」（散水車だろう）を常時走らせ、いざという場合には、消防活動に従事するといった創意工夫を行つており、注目されている。他にも橋本の実務的な活動を確認できるので、組頭としての橋本は、単なる名譽職ではなく、実務的なものであつたと評価できる。

■**古久屋の廃業** 橋本の活動は、五十五歳にあたる昭和十六年（一九四一）を最後に確認できなくなる。先述したとおり、相川氏の証言によれば、昭和十八年頃には古久屋の営業も終了していたといい、ほぼ時を同じくしている。この頃には、種々の活動を引退したのだろう。なお、橋本には女子一名を確認できるが、現在、橋本幸吉家は千住には居住がない。

家業である古久屋の経営で得られる財力を背景に、千住町の名士として地域の公益活動に尽力した橋本の活動は、千住町の近代史を考へる際、注目すべきものがある。全国消防組

組頭大会の開催に主導的立場を果たしたことや、総理大臣・国務大臣へのロビー活動など、千住の地域史にとどまらない近代消防史への広がりを持つている。今後も注目していきたい。

※1 本稿は、拙稿「千住町消防組組頭橋本幸吉にみる近代の消防」（『足立区立郷土博物館紀要』四六号、二〇二六年）に基づくものである。なお、史料の出典は、読みやすさを考慮し省略する。拙稿に明示しているので、適宜参照されたい。

また、橋本に関しては、土田宏成氏が昭和二年（一九二七）に千住新橋南岸で実施された「防空と消防連鎖警備演習」における橋本の活動について言及している（『近代日本の「国民防空」体制』神田外語大学出版局、二〇一〇年）。

※2 棚網保司「安藤昌益の稿本を伝えた 橋本律蔵3」（『足立史談』三〇九号、一九九三年）など。

※3 竹内秀夫編『新聞・官報にみる昭和の足立』足立区郷土資料刊行会、二〇一六年

【付記】本稿執筆にあたり、資料提供をはじめ、相川謹之助氏から多くのご教示を得た。記してお礼申し上げます。